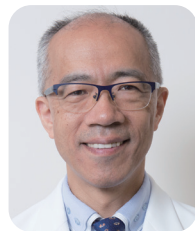


03 Ongoing 診療

心臓外科学講座
主任教授 國原 孝



急性大動脈スーパーネットワークの 重点施設になりました。

大動脈緊急症とは？

緊急に治療を要する大動脈疾患としては大きく分けて急性大動脈解離と大動脈瘤破裂が挙げられます。急性大動脈解離はさらに上行大動脈に解離が及んでいるか否かによってスタンフォードA型とB型に分けられます(以後、A型、B型と略します)。A型急性大動脈解離は非常に予後が悪く、手術をしないと一時間あたり1%の患者さんが死亡するため、二日間で約半数の患者さんが死亡すると報告されています。そこで、A型急性大動脈解離は診断され次第、緊急手術が大原則となっています。一方、B型急性大動脈解離は予後が良好であり、通常は内科的治療を適用し、大動脈破裂を防ぐために血圧を厳重に管理することになります。しかし解離によって臓器への血流が障害されるようであれば、手術あるいはカテーテル治療が必要になります。大動脈瘤破裂は通常は緊急手術が必要となりますが、部位によってはカテーテル治療が適用され手術侵襲軽減に大きな役割を果たしています。従ってこのような重篤な患者さんをいかに速やかに適切に加療できるかということが、その治療成績向上のためには重要な鍵を握ることになります。

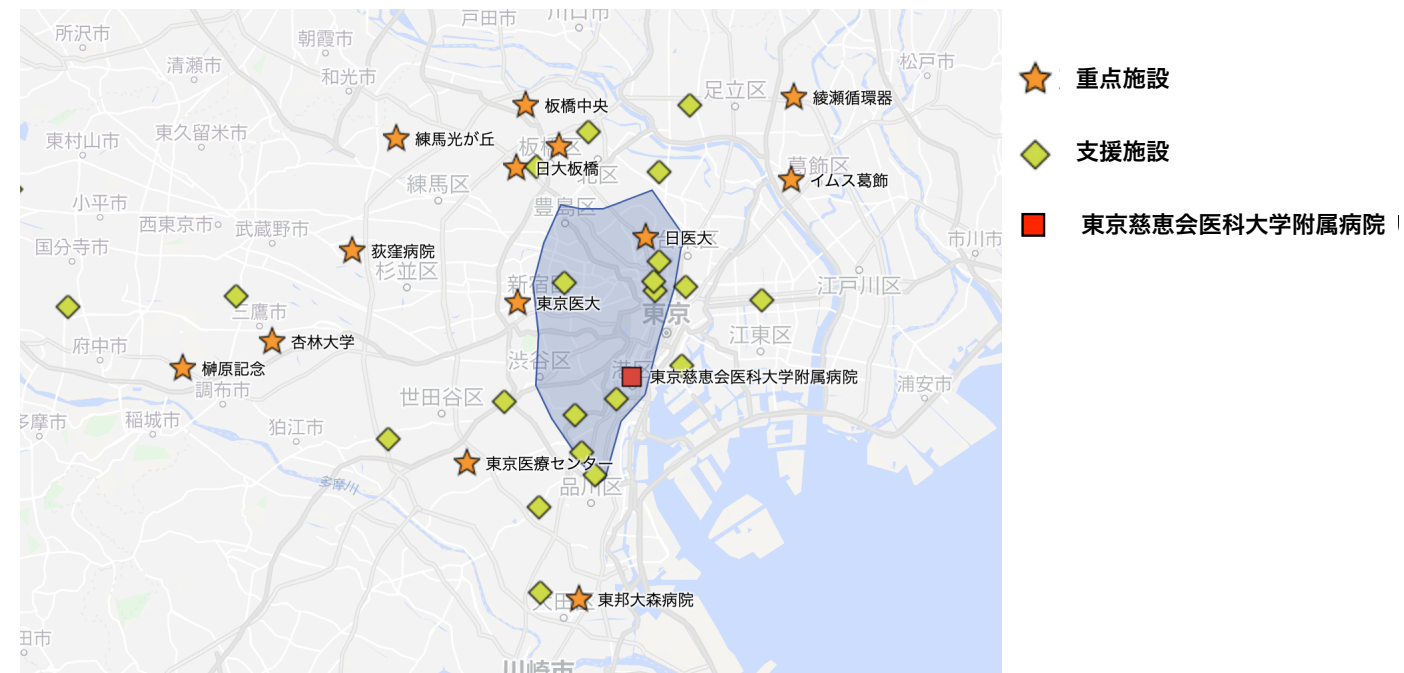
急性大動脈スーパーネットワーク

急性心筋梗塞を中心とする急性心血管疾患に対し、迅速な救急搬送と専門施設への患者収容を目的に、東京都CCUネットワークが1978年に東京都によって設立されました(CCU: coronary care unit)。このネットワークは、医療施設のみならず東京消防庁、東京都医師会な

らびに東京都健康局(現 東京都福祉保健局)との共同の活動であり、東京都の特殊救急事業として位置付けられています。その後このネットワークは着々と拡がりを見せておりましたが、大動脈緊急症に対しては専門の技術を有する外科スタッフが所属する施設へ速やかに搬送する必要性が生じてきました。そこで緊急大動脈疾患に対しより効率的な患者搬送システムを構築するために2010年に急性大動脈スーパーネットワークがスタートいたしました。加入施設は急性大動脈疾患の入院・手術を毎日24時間受入可能な重点施設と、優先的に受入可能な支援施設に分けられます。2021年7月1日現在、14の重点施設と26の支援施設が登録されています。東京慈恵会医科大学附属病院は2016年7月5日より支援施設として参画し、積極的に救急搬送を受け入れてきたことが評価され、ちょうど5年後の2021年7月1日に重点施設に移行いたしました。図を参照すればわかるとおり、重点施設は都心と離れたところに点在しており、山手線の内側にあるのは当院と日本医科大学付属病院の2施設だけです。したがって山手線内側の南半分の住民の健康を守る当院の使命は重大です。

当院における受け入れ態勢

大動脈緊急症に速やかかつ適切な治療を施すにはチーム医療が不可欠です。関連部門として救急部、心臓外科、血管外科、循環器内科、麻酔科、集中治療部、CCU、脳神経内科、脳神経外科、リハビリテーション科、手術部、看護部、臨床工学部、放射線部、輸血部など多岐に渡ります。ネットワーク加入にあたり、これらの各部門



図：急性大動脈スーパーネットワーク加盟施設の分布
濃い色は山手線の内側を示す
(Googleマイマップで作成)

が相談し、患者受け入れのフローチャートを作成しました。このフローチャートはその後改変を経て、いまま緊急症例の速やかな受け入れに寄与しています。また、チーム内のコミュニケーションツールとして活用されているのがJOINという当院を中心に開発されたスマホアプリです。このアプリ内に急性大動脈スーパーネットワークのグループが作成され、チームのメンバーが所属しており、なにかしらメッセージが投稿されるとメンバーのスマホにアラートが表示される仕組みです。例えば消防庁からの収容依頼を救急部の医師が受けると、まずこのJOINに一報を流し、各部門が一斉に反応するといった具合です。このような情報共有の仕組みは、重篤な症例に迅速に対応して救命率を上げることに少なからず役買っています。

コロナ禍の影響

当院は地域の基幹病院という性格上、これまで少なからぬコロナウィルス感染患者を受け入れてきました。最盛期は重症患者でICUが占拠され、定時手術すらままならないことがありました。それが下火になってからも、緊急手術症例はコロナウィルス感染を完全に否定しきれないため、陰圧室で厳重な感染対策下で手術し、術後は個室

で対応する必要性がありました。当院の陰圧手術室やICUとCCUの個室には限りがありますが、一方でわれわれも地域住民を守る使命を感じ、急性大動脈スーパーネットワークの患者受け入れをなんとか継続して参りました。今後再びパンデミックが襲って来る可能性は十分考えられますが、そのような状況下でも、当院の使命を果たすべく、チーム一丸となって対応して参りたいと思っています。

おわりに

このように重症な緊急患者を迅速に受け入れ、なおかつ適切な治療を施すには、多岐に渡る分野によるチーム医療が不可欠なことがわかりいただけたと思います。それを可能にするのがわれらが「ONE JIKEI」の精神であり、「慈愛」の精神なのだと思います。もし万が一皆様のお知り合いの方が大動脈緊急症を発症したとしても、当院の優秀なチームが治療に当たり、無事ご自宅にお返しすることができれば幸いです。